国史纂集
第26号
別府大学文学部
日本史研究室
〒874 別府市北石垣
電（0977）67－0101

# 後藤是美先生のことども

## ―一高校教師の実像―

後藤　重巳

平成七年十月十九日午後、恩師後藤是美先生が逝かれた。時に八十五歳であった。この訃報に接し、いつかはこの時が来るとは覚悟していたものの、ついに現実となった。畏友鳥養君から「是先生が死んだ」と沈んだ声で、逝去の報に接した瞬間、いかとも表現しがたい悲寂感に襲われるとともに、身体全体から、一斉に力が抜け去る感を覚えた。

先生は、明治四十三年五月、後藤是山の長男として、大分県直入郡久住に生まれた。父是山は、のち熊本で名をなした文人で、大正、昭和初期には徳富蘇峰・与謝野鉄幹・晶子などと親交があり、是美先生は、それらの感化を強く受けられた。父の関係で竹田中学校に進まず、熊本中学校を経て、昭和八年、國学院大学予科に入学、同十三年、文学部国文学科を卒業された。

◆目次◆

◆後藤是美先生のことども……後藤重巳
◆地名「豊国」の語源と「豊国造」……森　猛
◆筑後川の農業水利史の研究……重冨正秀
◆肥後藩の鶴崎経営をめぐって……寺本知弘
◆日本製塩史の研究…土居千佳子
◆浦に関する研究……松崎由紀子
◆平成七・八年度近世史関係卒業論文一覧

卒業後、香川丸亀の女学校・京都成安女子学院等をへて、十五年、千葉県立松尾女学校に奉職、当地で終戦を迎え、帰郷して、大分県立竹田高等女学校に勤務、学制改革によって竹田高等学校となった同校に、四十六年まで勤められ、定年退職された。飾り気のないその風貌や言動から、「ユウレイ」「久住のフルダヌキ」などと渾名されたが、「是さん」の通称は、学内ばかりでなく、竹田はもちろん、広く直入・大野郡内などでも知られ、結構、人気ある存在であった。

「宮仕え」の嫌いな先生は、上司に媚びを売ることも、出世を願うこともなく、推されていやいやながら勤めたのが「教務主任」、先生には終生で最苦労の役職であっただろうか。昭和三十年前後、大学受験志願生徒に絶対の信頼を博した『傾向と対策』の旺文社風の受験式勉強法を極端に嫌われていたが、これには大学時代の親友鳥居氏が、旺文社赤尾好夫社長の経営方針に同調しすぎることにも反感があったのかも知れないが、それにも増して、その頃から始まった詰め込み式の勉強へのご批判からであった。

『ばっかじゃなかろか』が口癖で『あいつは、おもしろいやつ』とは

先生の人誉めの口上。「おもしろい」を古典の語意でいく先生だった。

昭和二十五年、竹田高校に「民俗部」を創設。高校のクラブ活動に、全国の大学でさえ、まだ寡聞の「民俗」研究を取り入れられたことは、大いなる先見であった。

鳥養君や私は、この民俗部に、創立期から参加したが、初期の研究課題に「妖怪」「お化け」があり、文化祭で、各種「お化け」・「妖怪」の展示をし、参観者の度肝を抜いたものであった。

先生が顧問のこの民俗部は、休暇を利用しては、現竹田市内の周辺地域や、日向高千穂・熊本県野尻 高森・大分郡庄内阿蘇野地方などに、民俗採訪旅行に出掛けたもので、私達は大学に進んでからも、これらに参加したものであった。

先生は「エノハ」研究の第一人者で、もちろん、その釣り技にも長けていらっしゃったが一時は、家の庭の池に「エノハ」を飼育し、観察さえもなされた。

先生の授業は、いつも脱線気味で、その脱線も、とてつもない方向にすることが少なくなかった。特に、古典の和歌に関わる時間など、教科書から飛び出すことしばしばで、甚だしかった。しかし、古典の世界に、タイムトンネルで誘われるその教法は、私たちを虜にしたものである。

私は、是先生の「吟詠」をついぞ拝聴したことはなかったが、先生は、いつどこで覚えられたのか、旧制高校の校歌・寮歌、啄木や晩翠・藤村等の詩歌の朗詠がお得意だった。これらを部活や採集旅行の折ばかりでなく、時には、遠慮なさりながらも古典の授業の時間に、謡われることもあった。

「竹田高等学校生徒会歌」の歌詞は、周知のように先生の作詞になるものであるが、同じ「逍遙歌」の歌詞も、すばらしい作品であろう。

先生は、早くから短歌に親しまれて折ごとに自作され「麗雅夫」（ふもとまさお）のネームを用いられた。

数百首にも達するかも知れない先生の作品の内で、ご自身お気にいりだったらしい作品の一首と、先生の習作の二三を、以下に掲げて見よう。作品の多くは、昨年刊行の『後藤是美歌集』に収載されている。

お気にいりの一首、

○はろばろく
　阿蘇に流るる　裾の原
太古の夢の
　寂寞にたつ
……　…　……

○夢遠く
　山の彼方に　たゆたひぬ
はかなき吾か
　白き雲　浮く

○逝く雲よ
　やがては消えむ　さすらひの
生命の旅の
　吾ならなくに

○日溜りに
　雀が籾を　くひはじき
チュンチュと鳴きて
　ひそかなるかも

……　…　……

これらの作品はともかく、素材を歴史や人の生活に求めたものがかなり多い。これも先生の生き方の一面を表しているようである。

この先生の生徒観は、性善観に基づくものか、生徒みな善かった。したがって先生から、特定の生徒と隔離なさることはなく、もし、先生に近付けないとしたら、生徒側にその理由があると考えて間違いない。成績の上がらない者、先生の悪口を云う者ともども、いわば「教祖」「信者」の関係であった。すなわちこれ「コレさん教」とも呼べようか。

ただ是先生の欠点を敢えて挙げれば、女の子にやや「あまい」ことであった点かも知れない。しかし、これは、われら男子野郎の、かすかな嫉みであったのだろうか。

さて、先生が、先生らしいご研究の一端を世に問われた最初は、昭和五十五年八月に出版された『狂女オカネの生涯』であり、本書には『歌劇「お蝶夫人」のモデルを追う』とある如く、イタリアの歌劇作家ジャコモ・プッチィニ作の歌劇『蝶々夫人』の主人公をめぐる問題を追究したものである。プッチィニのこの歌劇は、当時、イタリアの文壇で活躍していたジュビッペ・ジァコオザと優れたジャーナリスト、ルイジ・イリイカの協力による歌劇台本を作曲し、『蝶々夫人』を完成したが、この「マダム・バタフライ＝お蝶さん」とピンカートンをめぐる舞台はピエール・ロチの『お菊さん』の条を追うものであり、このロチの作品にさらにジョン・ルゥサァ・ロングの『蝶々夫人』を混和させて構成されているらしいと考えられた。そしてこの「お菊さん」は、豊後竹田町烏岳に実在した「オカネ」がモデルではあるまいかと説かれるのである。

『「お菊さん」はカネである。ならば「蝶々さん」のモデルは、カネでなければならぬ』と云うのが、この研究の結論である。

是先生は、昭和五十七年二月から五月にかけて、大分合同新聞に「山郷夜話」を連載されたが、それに加筆・増補なさり、六十年九月、『山峡の竹田・直入』と題する一書を刊行された。

この書は、「はるかなる遠つ代びとの信仰のやまクシフルのタケ」にはじまり、「来し方をなつかしみつつ――岡本・竹田・三宅・綿田・小宛あたり――の項でおわる民俗採訪の記録である。約二十にわたる項目には、それぞれ――歩きつつ――、――想いつつ――と注記され、四十年にも及ぶ先生の、足で学ばれた成果が、美しい文章でまとめられている。

朽網（くたみ）久住に生まれ、一時期を除けば、終生、久住に生き、こよなく愛された久住を中心に、直入・大野地方の人々の生きざまを、情愛こめて見つめられた研究として注目される。

後藤家は、久住神社の司官家であり、先生は祖父・万太郎氏から可愛がられた。幼い頃から、身近に「神」を感じたものらしく、先生の思考の陰には、常に「神」へのつながりがあった。

鳥養君と私は、先生の鴻恩に報いるために、先生の還暦以後の節ごとに、何かをして差し上げたいと考え続けていたが、たまたま、六年春、奥様やご子息が、先生の歌集を編みたいと云うご希望あることを伺い、歌集刊行を引受、「是さん教」の信者の協力を得て、十月に完成、先生に差し上げた。先生は「ぼくァ、恥ずかしいナァ」と云われながら、大変お喜びであったが、これが先生へのただ一つのお返しになってしまった。

この先生、最後まで、変わり者ぶりを発揮され、私ども同級生の還暦

記念大会の前日に亡くなり、大会当日に葬式をさせ、私らを困らせると云ういたずらをなさった。

十二月九日、五十日祭が行われたが、祭壇には「後藤是美命之霊」と墨跡も真新しい位牌が悲しく映えた。遺影は、大分に入院の二三日前の撮影とか。あのやや傾け気味の顔に、何かをおっしゃりたがりそうな口元が軽く結ばれていた。

想えば、今やこれほどゆとりある是さん流の高校教師がいるだろうか。いや高校教師ばかりではない。画一的な教育によって、生徒・学生さえ、均一化され、個性喪失の時代を迎えつつある。

そして皆ては、こうした先生が、一校に一人や二人はいらしたものである。

一教師の死は、いま改めて私に、時代の大きな変質を痛感せしめるものである。（平成八年秋）